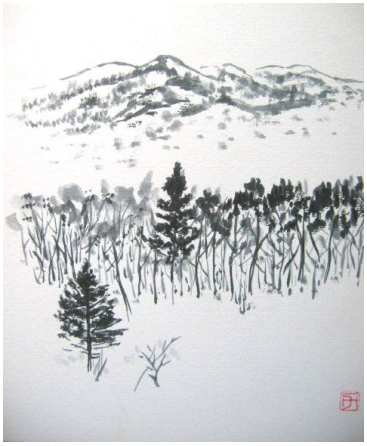
支　部　便　り　平成２０年１２月　みつわ会東北支部



白井さん

蕎麦啜る
　友の精進蕎麦啜る　爽風

これは新蕎麦なのだろうか。

蕎麦打ちを始めた友人が打った蕎麦は実に美味で、此処までに至った努力と技をも併せて味わっている。

１２月の行事

１２月　４日（木）★みちのく損保幹事会５時　引き続き５時３０分幹事忘年会
１２月１０日（水）★みつわ会忘年会（１１月支部便りで案内済）**乞！多数参加**

先月掲載「弔慰金等」“みつわ会本部”の欄補足

みつわ会本部細則には「弔電」が明記されていませんが、本部からの弔電は、現在までその都度送達されています。本部ではこれを明記するかどうか検討されている模様です。

芭蕉の辻物語（３）　　葛西　洋一

「仙台と芭蕉の辻付近の移り変わり」

（１）　仙台と芭蕉の辻

最初、現在の仙台の地図を拡げてみると、市街地の中心部はほとんど政宗の時代と変わらないように見えるが、最初の仙台は、田町、清水小路、元寺小路、県庁前の線の西側が市街地である様に見える。南北に走る大通りである二日町、国分町から南町、柳町、南染師町、北目町の間に商家が配置された。即ち、国道でもって市街地の東端とし、その道筋に国分寺門前から町屋を移して城に向かう角以北に移し、柳町の南に北目町を移し、又、柳町の南に染師町を移し広瀬川の近くに置き、その南は未だ田があったので田町と言ったと思われる。

政宗の時代、既に膨張していた仙台武士の屋敷町も広げられ、国道のつけかえも行われた。谷合に土手を築き、ここに出来た沼（堤）を堤町とした。又広瀬川の渡し場も鹿落から鹿ノ子清水の南誓願寺渡し、宮沢橋渡し、長町まで南下し元和元年（１６１５）に中田駅（駅伝制度）、元和四年（１６１８）には吉岡駅もつくられ、それぞれ元中田、元七北田の民家が駅前に集められた。この道も七北田、富谷を経由して吉岡に至り、さらに北上

する様になる。政宗の子宗清が吉岡に移ったのは元和二年であり、長町に橋がかけられたのは、伊達兵部の後見時代の寛文元年である。

政宗は寺院を市の中心に置いたが、北は北山、東は元寺小路、新寺小路、清水小路、田町を結ぶ線であることがうかがわれる。

芭蕉の辻は藩が辻番所を置き、札の辻と呼ばれていたように、忠孝条目、キリシタンの捨て馬の制札が掲げられたが、刑場が八本松、四郎丸付近にあったころ、“首曝し場”としても用いられた。そばに「板から下首をひく」よう鋸がおかれていたらしいが、誰も使う者は無かったという。刑場が七北田に移るまで行われていたらしい。

藩の建物は正保四年（１６４７）から文政四年（１８２７）まで七回の火災にあったが、文政の肴町の大火後再建された楼閣は、明治、大正、昭和の三代にわたって戦災まで残ったという。

（２）　二代忠宗の時代

市街地は東南と東北に伸びた。荒町の整備と杉山台の開拓である。慶長年間に荒町に移っていた東漸寺は、門の向きを東から荒町に面する様に南に変えた。荒町以南が次々と街道筋の町場となり、広瀬川の渡し場まで家が連続し、商人町となった。

杉山台が造成され、上杉山、中杉山、二本松、杉山等の通りが出来て、北一～北七番丁が東に延長された。北六番丁の北にあった天満宮は東に移され、寛永年間に榴ヶ岡に移された。家康ゆかりの地であった天満宮の跡地には、東照宮が建立され、東六番丁を延長して町屋家を集め御宮町とし、清水小路とほぼ一線になった。清水小路はまだ湿地であったが、この水を集め、これに面した屋敷には池をつくって水はけを良くした。結局これらの水は幅広い堀となって広瀬川に注いだが、井筒（井桁）のような、堀にかけられた橋の形から、五つ橋と呼ばれたのであろう。

また忠宗の奥方は徳川振姫であり、日蓮宗の信者であったので、大仙寺を全勝寺と名のらせ、振姫が亡くなるとこの寺に葬られたので、孝勝寺と仮称した。

鉄砲町北の小田原も清水沼通りの東まで侍屋敷となり、五十石以下の武士が住んでいた。

元禄時代は仙台が最も膨張した時代で、今の茶畑付近も侍町とされた。

孝勝寺は仙台の大寺となり、大伽藍となった。

綱村の敬神宗祖は度を越し、綱村政は苦しくなった。伊達騒動の後でもあり、四十四歳で隠匿させられた。

この時期、芭蕉の辻については、火災以外の資料は少ない。

直行さんの丘　　千葉繁明

私が画家の坂本直行氏を知ったのは、仙台文化横丁にある「源氏」という店に掲げられている絵を見てからである。原野と雪を抱く日高山脈が描かれたこの風景画は、なぜかもの悲しい静寂の中に、その底を流れる作者の人柄と、詩情が胸にひしひしと伝わり、私の心を揺さぶり、いつとは無く、この絵に描かれている雪を抱いた日高山脈を見渡す十勝の原野に立って見たいと思うようになっていた。所用も有ったので、７１歳を迎えた１０月の末に、妻と二人で旅に出ることにした。

晩秋の北海道は寂莫として物悲しい風景であるが、車窓から見る唐松や白樺の林は黄緑色に輝きその美しさはなんともいえない。その日は帯広に宿を取り夜の街に出てみた。私は初めての知らない街で、いい店を探して歩くのが好きで旅に出る楽しみでもある。ぶらぶらしながら、とある屋台を見つけ暖簾を潜ってみた。人の良さそうなご夫婦がやっている小さな店である。私と妻が座ると一杯になるようなカウンターで今が旬であるという“ししゃも”を焼いてもらい一杯やっていると、若い夫婦が入ってきた。この店の主夫婦の第二の人生を「人生の楽園」というテレビ番組で取上げ、その取材撮影に訪れたスタッフの一人とのことで、この店が気に入って奥さんを連れて来たのだと言う。たまたま入った店が「人生の楽園」のご夫婦がやっている屋台であったとは、いい店に入ったものである。

北海道十勝　中札内から日高連峰を望む　繁明

客は我々四人だけなのでお互いに話が弾んだ。我々が仙台から来たというと、その若い奥さんが突然に仙台の「源氏」という店に行ってみたいと言うではないか。私

が一枚の絵に惹かれこの地に足を踏み入れるきっかけを作った馴染みの店の名前がこんな所で出てきたのであるから驚いた。割烹着姿の美しい女将さんが居て燗をつける器械がある居酒屋ということで、こんな所まで名前が知れていたのである。思いがけない出会いと美味しい旬の味にすっかり良い気持ちになって店を出たら、ちらちらと白いものが舞っていた。帯広の街の初雪である。

翌日は秋晴れの中、レンタカーで中札内美術村を目指した。一時間半ほど走り原野の中の小高い丘に立って見た。牧草地と唐松林の遥か彼方に望む日高山脈の眺めは格別で、まさに直行さんが描いた風景である。２３歳の時初めて十勝を訪れた坂本直行氏が青空の下に広がる日高山脈の魅力に参ってしまった場所である。直行は（なおゆき）と読むが、地元の人々は親しみを込めて「ちょっこうさん」と呼んでおり、このような原野を見渡せる丘を直行（ちょっこう）さんの丘と呼んでいるのである。直行さんは以後３５年間此の地に入植して原生林が鬱蒼とした悪条件の原野を開拓する傍ら、野の草花をスケッチし、日高山脈の美しさを描き続けていたが、あまりの自然の厳しさに五十四歳の時に離農、寂しく開拓途上の原野を去って、晩年は札幌に移り画業に専念していたという。ガンを患い１９８２年（昭和５７年）７５歳で永眠。しかし、直行さんが愛した日高山脈は当時と変わらず聳え立ち、描いた絵は見る人に感動を与えているのである。

「蝦夷開拓は一人になっても必ずやり遂げる」と言いながら、その夢を実現させる事もなく暗殺された坂本龍馬の子孫である直行氏は、あえて龍馬のことは語らなかったという。ひたすら農民として、画家として生き、「わが人生に悔いなし」と、「志」に生きた龍馬の人生と合い通じる生き様を絵を通して言い伝えているのである。